

# 陽気だより

養徳社 検索

ホームページからご覧いただけます  
No15 2008.6.15

## 第二号から

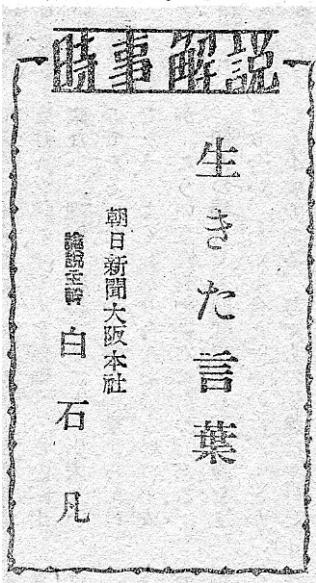
「陽気」は、昭和24年5月の創刊、平成21年に60年を迎えます。その足跡の一端を、昔の記事から振り返っていきます。

### 媒酌の苦勞

職場や学校や社交の会などで、適齢の男女が接近する機会が多くなり、戦後民主主義の恩恵を最も早く実質的にうけているのは、自由結婚であろう。結婚の相手を自分で定める恋愛結婚が理想的には相違ない。しかし今日の日本では、みんながみんな適当な相手を自分でみつけるのはむつかしいし、また恋愛と違って結婚には、二人の愛情以外の条件が必要なので、これを考えてくれる仲人の存在は必ずしも無用ではなさそう

だ。それに、アメリカのような国でも、ひきこもり勝ちな内気な娘はとかく婚期を逸し、自主と自由を尊ぶ建前だけに、そんな娘をもった親の悩みは格別に深く、日本のように媒酌結婚という便利なやり方のあるのはうらやましいという外国人もいる。

日本では古くから「夫婦は一生のうち何回か媒酌人をつとめないと極楽にゆけない」ともいわれている。これは自分たちの夫婦生活の喜びを他人にもわかたなければならぬいとす社会報恩の教えなのかもしれない。



日記抄」を見ると「此人（媒酌をした人）善意をもて媒酌してくれたるなれど眼鈍くして人を観ること徹せず、妻をあやまり予をあやまるに近し」と記し、さまざまに思いかえして不運を忍んでいる。媒酌というものは便利ではあるが、ほんとうによい夫婦をつくらうと思えば、なみたいていの苦勞ではない。自らは善意にして来世は極楽にゆ

けるにしても、いいかげんの仲人口をきかれたのでは、無理につくりあげられた夫婦は、この世で地獄の思いをなめさせられる。

谷崎潤一郎氏の小説「細雪」は、二人の姉妹の結婚ばなしが中心となって筋を運んでいく。「世間の荒波の中へ放り出せるような人でない」雪子と「自分で好きな相手を見つけて自由結婚をするように出て来ている」妙子とが対照をなし、従って雪子の縁談には姉夫婦はさんざ苦勞をさせられるのである。

結婚の媒酌は、化学反応の速度を著しく変える触媒に似たところがあり、説によると、触媒はそれなしには生じ得ない反応を起すものではなく、反応の速度をただ増し、あるいは減速するのだという。男と女とは、放っておいてもどうせ一緒になりたがる性質のものだが、その結合を確実に有効に促進するためには媒酌のあるのが便利なのである。もつとも愛情、気質、健康、生活能力くらいで満足すればいいものを、家系とか学歴とか係累とかにこだわったり、こ

結婚速度を著しく減速するような場合もないではない。（後略）

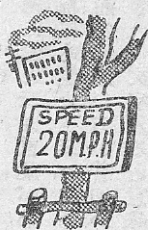
白石 凡（ほん）……一九八四年、八十五歳で没。朝日新聞東京本社論説副主幹などを務める。

### 海外小咄（第二号より）

○アナウンサーのファール  
君は聴取者料金を納めるように警告して放送を終え帰宅してみると、自分の聴取料滞納で十五弗（ドル）の罰金が科せられていた。

○カリフォルニアの或る町で、ルゴという無頼漢、公会堂の周囲で出鱈目に拳銃を乱射していたが、たちまちのうちに呆気なく逮捕された。実はその公会堂では警察官の宴会が催されていた。

○倫敦（ロンドン）の大学で心理学者バートレス教授は記憶の組織についての講義にかかって開口一番、いささか気恥ずかしそうに弁解して曰く、「実は助手が実験装置を持って来るのを忘れたもんで……」



## 教祖の御姿を偲ぶ

教祖ご在世当時、教祖に触れ、おちばに足を運んでいた人々の話が、『教祖のお姿を偲ぶ 改訂版』（上村福太郎著・道友社新書）に載っている。

――宮本ていさん（明治九年生まれ。昭和二十五年、数え七十五歳）の話――

「私と教祖の内孫のたまへさん（二代真柱御母堂様）とは学校友達でした。……そこで私はちよこちよこお屋敷に遊びに参りました。……たまへさんと二人して、『おばあ様、何か頂戴』とおねだりに行き

## 私「陽気」の仲間を探してください

私は来年還暦を迎える「陽気」です！天理教の信仰を胸に、私と同じ名前で作られている、地域のみなさんに親しまれている、「お店」を知りませんか？ “おお、そう言えば”と思われるみなさま、ご一報ください。

電話0743 (62) 4503 FAX0743 (63) 8077  
どうぞ、よろしく申し上げます。（ハガキも可）

## 「陽気」創刊59周年記念懸賞エッセイ募集中

枚数 20枚から25枚（400字詰め）

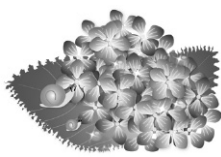
締切 7月31日（消印有効）

1等 正賞 盾 副賞 10万円

2等 正賞 盾 副賞 5万円

3等 正賞 盾 副賞 3万円

詳しくは、「陽気」5、6月号をご覧ください。



ますと、『この子はなあ』とお笑いになって、紙に包んだ金平糖を下さいました。

ある時、たまへさんと中南の門屋に遊びに参りますと、教祖は小机に向って、目をふだいて（つぶって）字を書いておられました。私は、『おばあちゃん、目ふだいて字書くの』と申しますと、教祖は、『は、は、は、』と笑っておい

でになりました」  
「門屋の入った向うに、信者の参って来て入るから風呂がありました。その手前の土座に直径一寸五分ばかりの小石が、もつこに三杯程盛ってありました。そこがかんろだいの所で、門の方から見て、そのかんろだいの右より少し向うに壺をふせた小さい井戸がありまして、いつも美しい水が湧いていました。その水を皆参った人はこうずい（神水）といって有難がつて頂いて帰りました。その水を頂くと不思議に又、病氣や痛い所が治りました」

## 「陽気」読者講演会

### 家族が一番の抗がん剤

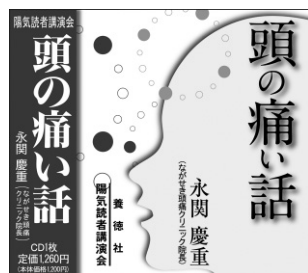
5年前、胃がんで胃を全摘した氏が、信仰を通して得た生きる勇気を語る。

高杣 禎彦（ようぼく・俳優 元チェッカーズ）

10月25日（土）午後2時より

陽気ホール（おやさとやかた 南右第二棟四階）

## 講演会CDの紹介



## 頭の痛い話

永関 慶重

（ながせき頭痛クリニック院長）

1、260円（税込）

現代病の一つである「頭痛」。三千例を超えるうつ病患者の生育歴を探り、原因を究明した専門医が、その克服法をわかりやすく解説しています。ストレス社会から脱出する「心」をサポートします。

## 最新「陽気」七月号から

「スジャータ」でおなじみのめいらくグループ・日比孝吉代表と養徳社社長・今村俊三の対談を掲載します。心を打つ話がたくさん出ています。どうぞご覧ください。

※ご購入は、おちばの各書店でお求めくださるか、直接当社へご注文ください。

☎0743・62・4503

## 養徳社 よもやま話

○月○日 「ほんまに、折り紙ですかあっ！」終業時、叫び声を上げていた。テーブルには立派なマツタケが三本。そっと触れてみるとしっとりして、触れた指先を鼻に近づけるとマツタケ独特のかぐわしい香りが残っている。このマツタケに、カンボジアの大臣もびっくり仰天したとか。そりゃそうだ！ 顛末は、陽気七月号をご覧ください。



## 広告を載せませんか

ようぼくの企業や会社の広告を『陽気』誌へ載せてみませんか？ 掲載料金は、広告の大きさによって異なります。料金は、記事中で一回二万円から。

詳しくは養徳社広告係まで  
☎0743・62・4503

この「陽気だより」を各支部例会などの折、広く養徳社からのお知らせとしてご利用くださいますよう、お願い申し上げます。

養徳社